「詩との出会い」
――自分の詩を見つける――

仲田輝康

一　はじめに

これは前任校の広島大学附属福山高校での実践をまとめたものである。先に「城の崎にて」、「蝿」、「赤蛙」の三作品を扱った授業について報告させてもらったが(注1)、今回の報告は、それの詩版とでもいうべきものであり、同じ生徒たちを指導の対象としている。発表の順序は逆になったが、授業としてはこちらの方が早く、むしろ今回報告する授業が出発点であり、さきに報告した小説の授業はその延長線上にあるものである。

ここで「自分の詩を見つける」というのは、自分がいいと思う詩、自分の心に訴えかけてくる詩を見つけるということである。自分の好きな詩と出会って、「いいなあ」と感じ、「この詩、いいねえ」と語り合える。そして語り合いながら、詩の読みを広げ深めていく。素朴ではあるがこれが自然な学びの姿であり、成長の姿ではないかと思っている。生徒たちが、自然にそしてのびやかに自己の感性を解放して詩を楽しみ、そのことを通じて豊かな言語体験を得ていく。そんな授業をしたいと思って行った授業である。

生徒がのびやかに自己を解放し表現する場を、授業の中でも設定する必要があると思うようになったのは、以前に持っていた学年で、何人かの不登校の生徒と出会ったのがきっかけである。

不登校の子供たちと接していると、たとえそれがささいなことであったとしても彼らが自分の欲求やあるいは自分自身を感じ、それを表現する、そういうことを重ねていく中で、次第に心も整理され、身も心も動きがのびやかになり、声や表情も緩やかになっていくのを感じる。そうなるにつれて次第に自ら活動しようとし始める。もちろんこれはきわめて単純化して言っているので、実際にはこんなに単純には言えないが、このような過程を通過して自己の主体性を取り戻し、自らの育つエネルギーが解放されていくようである。不登校の子はけっして特別な子ではない。現在の子どもたちが育っていく中で持っている問題を、最も

突出した形で突き付けているにすぎない。

年々、授業の中で生徒の発言を引き出すことが難しくなっているように感じる。質問してもすぐに「わかりません」と答えてすまそうとしたり、自ら考えようとせずに、性急に正解を求めようとすることがふえてきたように思う。教室で学習することに対して白けているという感じを受ける。彼らも、正答の枠からはずれることを恐れ、授業の中で自分を感じ表現することを自ら規制しているように思われる。

生徒たちが自ら考え、自ら表現しようという気持ちになるためには、彼らの思いをそのまま認めてやるところから出発しなければならない。そして彼らも、自分の思いが受け容れられていると実感することによって、自ら育とうとする力、自ら学ぼうとする力が、詩なら詩を読みたいという思い、あるいは何かについて考えたいという思いが湧いてくるのではなかろうか。

二　授業の実際

生徒の感じたこと、抱いた思いをそのまま認めてやること、そのうえで、自ら選択し、評価する機会をつくってやること、これを授業の基本方針とした。そしてそのための教材として詩を選んだ。詩なら生徒も「正答」を気にせず、自由に発言しやすいだろうと思ったからである。いわゆる詩の理解を目的とした授業ではないが、生徒が自由に自分の思いを表現することによって、教師の指導を中心とした授業よりも、かえって詩との深い交感ができるのではないかという思いもあった。

授業の進め方は小説の場合と基本的には同じである。どの詩が自分にとっておもしろいのかということを中心に学習を進めていった。自分にとってどの詩がおもしろいのか、なぜおもしろいのかを考える。その中で詩の内容や表現についても自然に考えていく。そして友達と話し合う中で自分の読みも深めていく。

こういうやり方で学習するのは生徒にとってもはじめてだったので、このやり方に慣れてもらうために、自然に、そして気楽にこれがいいと言える詩から順番に、教材を配列したつもりである。

授業をしたのは一九九二年五月、対象は広島大学附属福山高校の一年生五クラスである。教材はプリントを使った。具体的な授業の展開は以下のとおりである。

第一時

・単元名「詩との出会い」を紹介し、板書する。

「あまりむずかしく考えず、自分のいいなあと思う詩と出会ってください。」と言った。

・プリント「煤煙と青い空」（注2）を読む。

詩を読むにあたっては、自分の好きな詩を見つけるこ

とが一番大切である、ということを理解する。

・プリント「詩との出会い　1」を読む。

収録作品

「するめ」　まどみちお

「鳩」　高橋睦郎

「僕はまるでちがって」　黒田三郎

「葉月」　阪田寛夫

・右の四つの詩の中から一番いいと思った詩を選び、その題名と、なぜその詩がいいと思ったのか、その理由をカード（西洋紙をを小さく切ったもの）に書く。

・互いの感想を読み比べる。

・自分の感想を発表する。（数名）

単元全体の導入の時間なので、読んですぐわかる詩を選んだ。授業のあと、何人か集まって、プリントを見ながら、「わたし、これわからんかったよ。」などと言って話し合っていた。これで、詩を気楽に楽しむための自然な流れはできたと思った。しかし、クラスによっては、カードに書く時、「書けんー！」と苦しんでいる生徒もいた。

次に生徒の書いたものをあげておく。

するめ　A（男）

最初の　とうとう　と最後の　……　がとても静かにはかない。たくさん言葉をならべるわけでなく、この詩のみじかさ自体もいい味だしている（するめのことではない）。

葉月　B（女）

ふざけたような口調だけど、哀しい感じがすると思った。相手の人のことをとても大事に思って、相手の人格を傷つけたくなくて、自分のことばかり責めている。そんな感じがした。それに、「おれ」とか「わし」とか何げない言葉にすごく気をつかっているように思えた。

第二時

・前時に書いたカードのうち、他の生徒の参考になると思われるものをいくつか選んで印刷し、配付した。教師の方で簡単な補足をしたが、詩の解釈については言わず、生徒の文例について、「こう書いているところはおもしろいね。」とか、「こう書いているけどなるほどね。」という程度の補足をした。

・プリント「詩との出会い　2」を読む。

「夕方の三十分」　黒田三郎

「鴉」　入沢康夫

「だれも　いそがない村」　岸田衿子

プリントを読んだ後の学習活動は、前時と同じであるが、カードは少し大きくした。

生徒の例をあげる。

だれもいそがない村　C（女）

のんびりとした空気が伝わってきます。「まめのつるに　まめの花」というところが好きです。まめの花が咲いている……あたりまえのことだけれど、いいです。

一度行ってみたいような、のどかで静かな村の様子が目に浮かびます。わたしはいそぐことがきらいだけど、つい、いそいでしまうので、いそがない村がいいです。

夕方の三十分　　D（女）

「〜シテェ　オトーチャマ」という会話が、とても子供らしくて、お父さんに甘えたくてたまらなく思っている感じが、カタカナで書いてあることで、よりいっそう光ってみえました。

お父さんである作者も、娘にかまってやりたいのに、それが簡単に出来なくて、自分を責めて、こんな自分はきらいだなあと思っているのではないかなという気がしました。

最後の一章がとても優しくて、静かな感じで終わっていて、私までうれしくなってくるようでした。

第三時

第三時はグループで学習をした。

・前時のカードを印刷したプリントを配付し、読む。

・プリント「詩との出会い　3」を読み、詩を評価する。

「歳末閑居」　井伏鱒二

「くらし」　石垣りん

この時間は、生活の詩を取り上げた。内容も少し考えないとわからない程度のものを選んだ。四人程度のグループをつくり、詩のわかりにくいところや感想を話し合わせ、それぞれの詩に描かれているのはどういうことかということを考えさせた。その後、グループとしてはどちらの詩がよりいいと思うかと、詩の評価を考えさせた。全体的に時間が足りなかったようである。活動の内容は記録して提出させた。

第四時

・プリント「詩との出会い　4」を読む。

「引き裂かれたもの」　黒田三郎

「君も」　吉野　弘

「ねずみ」　山之口貘

「風とボロとの伝説」　会田綱雄

「海」　石川逸子

・五つの詩を読み、一番気に入った詩をひとつ選び、その題をカードに書いて提出する。

ここでは少し社会的な広がりのある詩を取り上げたが、意味がわからなくて、好きともきらいともいえないような詩は選ばなかったつもりである。

第五時

前時に選んだ詩をもとにグループをつくり、その詩についてグループで話し合わせた。その後、内容について考えさせ、その詩がどんなふうにいいのかということについて話し合わせた。話し合った内容は、記録して提出させた。

第六時

前時にグループで話し合ったことを、前に出て発表させた。

三　アンケート・中間考査・夏休みの課題

一連の授業の後、簡単なアンケートをした。アンケートの質問内容は次の二つである。

一　「詩との出会い　1～4」の中で、いいなあと思う詩がありましたか。あれば、その詩の題名を書きなさい。

二　「詩との出会い」の授業についての感想を書きなさい。

また、一学期の中間考査は、最初から、書かせる問題にしようと思っていた。当初は、プリントに取り上げていない別の詩について、その解釈と評価を書かせる応用問題にしようと思っていた。しかし、書かせる問題にすると言ったところ、複数の生徒から、「書くのなら好きな詩について書きたい」と言われた。何か書きたいことがあるような様子だったし、他にもそういう気持ちの子がいるようだったので、それもそうだとは思ったが、評価をどうするかという問題があったので最後まで迷った。最終的には、授業で取り上げた詩の中から好きな詩を選ばせて、それについて書かせることにした。試験には「詩との出会い」のプリントを持ってくるように予告しておき、解答は八百字詰めの原稿用紙に書かせた。試験というよりも、試験の時間を使ってレポートを書かせるという感じである。問題は次のようにした。

問題　「詩との出会い」のプリントの中から、各自よいと思う詩を一つ選びだし、その詩について次の要領で、四百～八百字で論じなさい。

・その詩が何を描いたものであるかを述べ、その詩のどういう点がどんなふうによいと思ったのか、具体的な表現を示しながら説明し、感想を述べなさい。

・できるだけ筋の通ったわかりやすい文章を書くように心がけなさい。

評価は、A、B、C、D、Eの五段階評価とした。

また、夏休みに、「どんな詩でもいいから、自分が気にいった詩をひとつ見つけてくる。レポート用紙に詩を書き写し、その詩に関する簡単なコメントをつけて提出する。」という課題を出した。提出したものは、後で清書させ、印刷してクラスごとに冊子をつくった。

四　中間考査と夏休みの課題から

中間考査と夏休みの課題の中から、いくつか生徒の書いたものを見ていく。

中間考査で、E君は「僕はまるでちがって」を選び、「美しい蝶というたとえが最高です。」と書いていた。彼はこの詩を自分の初恋の体験と重ね合わせて読み、「恋のことなどは、自分でもよく分からないぐらい変なものです。得に僕は、そういうことを表現することが苦手です。でも、この作者はそこの所をすばらしく表現しています。ぼくには出来なかったことを。そして僕が言いたかったことを。」と書いていた。

また「君も」を選んだF君は、こう書いている。

僕がこの詩を選んだ理由は、数ある詩の中で、一番親しみを覚えたからです。国語に弱い僕は、詩の作った人の心をつかむことができず、従って多くの詩は興味がわいてきませんでした。けれども「君も」は結局作者の心やイイタイコトをつかむことはできませんでしたが、読んでみたとき外の詩になかった感動や驚きがありました。解釈は不十分ですが、僕なりにまとめてみました。

こう書いて、この後彼自身の詩の解釈を述べている。その中で、「苦悩の人が死ぬのを見届けてから」とか、「ぼんやりと夜ラジオ番組の全部を聞き終えてしまうことはないか」というところが気に入っていると書いているが、彼の解釈は、解釈というよりも自分の心をたどっているようである。

彼らはともに、自分の生活体験を背景にして詩を理解し、自分の気持ちにぴったりとくる詩を選んでいる。何も教師がこむずかしい説明をしなくても、詩を読む原点というのはこういうものでいいのではないかと思うし、むしろこういう原点が大事なのではないかとも思う。彼らは詩の中に自分を読み、詩の感想を述べることによって自分を言い表している。

Gという女生徒の書いた答案は強烈であった。彼女は黒田三郎の「引き裂かれたもの」を選んだ。（なお引用の中で「詩の授業の感想を提出する時、よいと思う詩を『歳末閑居』として出しました。」といっているのは、授業の後に行ったアンケートのことを指している。）

一人の人間として結核患者を題材として識者を代表とする世間の冷たさと人間の命の重みを描いているのだと感じました。こう書くと、授業で発表した内容と重なってしまいますが、私自身去年の暮れに父を事故で亡くしたのでこの詩について感想を書こうと思うとどうしても先に書いたように感じられます。

この間詩の授業の感想を提出する時、よいと思う詩を「歳末閑居」として出しました。「引き裂かれたもの」を読む時、父と重ね合わせてしまって他の詩のように

落ち着いて読むことができなかったからです。父の事故も新聞やニュースに大きく取り上げられました。これは事故だから、この詩に描かれていることとは少し性質の違うことかもしれません。でも、第六連の「一人死亡とは　それは　一人という　数のことなのかと　一人死亡とは」というところが激しく私の胸を打ちました。そして「死んだひとの永遠に届かない声　永遠に引き裂かれたもの。」

私の父は忙しい人であまり口をきいたことはありませんでした。変に思われるかもしれませんが実際そうだったのです。それで私は父を家族として感じることがあまりなかったのですが、父の死後、事故についてのニュースを見ていて、強く家族だということを感じました。この詩のとらえ方についてはあまりに主観が入りすぎているので

ここまで書いたところで時間がきたため、途中で終わっている。

もし、授業の中で「この詩はどんなことを描いているのか。」と聞いたのなら、「一人の人間として結核患者を題材として識者を代表とする世間の冷たさと人間の命の重さを描いている」という説明は、答えとしては十分であろうし、それを考えることは、それはそれで意味のあることではあろうが、しかしそんなふうにまとめるだけで終わったなら、この詩を読むことに何の意味があるのだろうかという気がする。そんな読む主体とかかわらない答えを聞いても、それがどうしたのかという思いが私にはある。彼女のこの文章を読むと、このことをいっそう強く感じる。

たぶん彼女は、他の誰よりも真正面からこの詩が訴える重さを受け止めている。それは「『一人死亡とは　それは　一人という　数のことなのかと　一人死亡とは』というところが激しく私の胸を打ちました。」というところからもわかる。彼女は自分の体験と思いを抱いて、詩と激しくぶつかっていると言っていいであろう。この詩は彼女には残酷であったかもしれないが、彼女のこの文章を読むと、詩と向き合うことの厳しさを突き付けられたような気がする。

夏休みの課題では、さまざまな詩が選ばれたが、その中でも印象的だったのが、HさんとDさんが選んだ詩と、それにつけたコメントである。HさんとDさんはともにまじめで優秀な生徒であったが、この当時二人とも体調を崩して欠席がちで、いろいろ悩んでもいたようである。この二人がともに、コメントの中で、「ほっとする」という言い方をしていたのである。

Hさんが選んだ詩は、「わたしは長い歳月　上にのびることばかり考えて　／　土の中深く根を張ることを忘れていたようです」という言葉ではじまる。そして、幹や枝葉の重みに耐えられなくなったとあって、最後に「しかし　おかげさまで　いまでは　／　眼に見えない土の中で　／　弱かった根が新たな活動を始めたようです　／　いや　そ

れ以上かも――　／　だれにもわからない根だけが知る　／　静かな充実感を持ちながら……」と終わっている。この詩に、彼女は次のようなコメントをつけた。

上を上をめざして背のびばかりしている私たちに対してもっと〝自分〟を見つめなおすこと〝自分〟のはん囲で〝自分〟を精一杯に生きることを教えてくれているように思います。

Iさんの作品には、やさしさ、人間味というものがあると思います。「人間の生き方」を教えてくれているようで読んでいるとほっとします。

彼女が取り上げた詩を読むと、そこには彼女自身の姿とその悩みが、そしてそれがいやされていく様子が投影されているような気がする。

もう一人のDさんは、先に「夕方の三十分」の感想を紹介した生徒である。彼女は、黒田三郎の『小さなユリと』の中の一編を選び、次のようなコメントをつけている。

黒田三郎さんの詩がとても好きだったので、「小さなユリ」ちゃんの出てくる詩の中から探してみました。ユリちゃんと、お父さんと、お母さんと、それぞれの精一杯の気持ちがいっぱいにあふれていて、思わず心がほっとして、気持ちが優しくなってくるようでした。最後の三行の、お父さんの呼びかけの部分が、特に気に入っています。

ちなみに詩の最後の三行は、次のようになっている。「小さな小さなユリに　／　僕は大きな声で話しかける　／　新宿で御飯たべて帰ろうね　ユリ」

中間考査でも、彼女はやはり黒田三郎の「引き裂かれたもの」を選んでいたが、一連の彼女の感想の中には一貫したものがある。それは、おそらく彼女自身も意識していなかったかもしれないが、ある種の温もりと安らぎとでもいったらいいのか、苦しんでいた当時の彼女の心が欲していたものであるようにも私には思われる。

DさんやHさんが、夏休みの課題で見つけてきた詩は、彼女たちがそれぞれ出会うべくして出会ったものだという感じが強くして、なにか運命的なものさえ感じる。そして彼女らが二人とも「ほっとする」という言い方をしているのが印象的であった。彼女たちには日常の生活の中でも、もっとほっとする時間が必要だったのかもしれない。

Dさんは、中間考査の答案の最後にP・S・として次のように書いてくれていた。

「僕はまるでちがって」「夕方の三十分」「引き裂かれたもの」と、私は毎回の授業の中で選んだ詩が、みんな黒田三郎さんの作品でした。もしかしたら、私と黒田さんは感性が似ているのかな？　詩を読んで、こんなに心がはっとして、すっと感情が湧きあがってきたのは、今回が初めてのような気がします。詩の勉強はとても楽しかったです。

詩を「教えない」授業に自信があったわけではない。む

しろこれでいいのかと常に不安であった。彼女のこの言葉もこのまま額面どおりに受け取るわけにはいかないが、正直なところ、これを読んだとき、この子がこう書いてくれた、それだけで十分ではないかという気がした。

五　まとめにかえて

今回の授業では、生徒の詩の読みを正すということは、まったくといっていいほどしなかった。といって、自分の好きなように読みなさいと言ったわけでもない。繰り返して言ったのは、どの詩がいいと思うか、なぜその詩がいいのかということである。内容の理解はそのことを通じて考えさせ、解釈の補正は生徒同士の話し合いにまかせた。

先にふれたように、授業の最後にアンケートをした。自由に書いてもらうために無記名にした。結果を見るまでは、このような、答えを言わない授業のやり方に対する不満も多いのではないかと不安であったが、アンケートの回答で多く見られたのは、「グループで友達の意見を聞くことができてうれしかった」というものと、「先生が解釈を言わなかったので、自由に考えられてよかった」というものであった。「自分がやっているという感じがしてよかった。」と書いた生徒もいる。これら生徒の回答を見て感じたのは、彼らは、先生に詩の解釈を教えられるよりも自分たちの力で読みたいと思っているということ、友達と話し合うことは楽しいし、話し合いながら考えたいと思っているということであった。そしてこれらはいずれも強い欲求としてあるようであった。これには、附属高校の生徒が比較的学習能力が高く、自分で学習する態度もある程度身につけているということもあるだろうから、単純には一般化できないかもしれないが、それにしても、こういう欲求の強さは正直なところ想像以上であった。

また、「自分が感想を書こうと思って選んだ詩は、それぞれどこかに、共感できるものがあり、自分の言いたいこと、思っていることが代わりに書いてあるような気がした。」と書いた生徒もいる。「読んでみるとなんとなくわかるのに、うまく言葉ではあらわせない詩や、正直言って、深く読みとろうとすると全然訳のわからない詩もありました。でもやっぱり気に入った詩は、どこか心に響いてくるものがあって、何度読み返してみてもよかったです。」と書いた生徒もいた。

共感できる詩、何度読み返しても心に響いてくる詩、そういう詩を見つけるだけで十分なのではないかと思ってはじめた授業であった。生徒は詩によって解放されたり、いやされたり、あるいは気楽に楽しんだり、またあるいは激しくぶつかったり、それぞれの詩との出会いをしたようである。ここでは紹介できなかったが、彼らの書いたものを見ると、最初の小さなカードから始まって、その一つ一つがおもしろい。解放された時の彼らの豊かさと、彼らにそ

れを可能にさせた詩の力というものを感じさせられる。

ともかく、生徒も教師も共に楽しめた授業であった。

本稿は、第一六回広島大学教育学部「高校教育講座」（一九九二・一〇・三一）において発表したものに、加筆したものである。

注1　拙稿「おもしろさを見つける小説の授業―『城の崎にて』・『蝿』・『赤蛙』を比較し評価する―」（『国語教育研究　第三十七号』　平成六・三）

注2　黒田三郎『詩の作り方』（明治書院　昭和四四・一一）の冒頭の章「詩との出会い」より

（岡山県立総社高等学校）